

はじめに

フィジーのアゲハ *Papilio schmelzii* に関しては 2000 年の一応の成功以降も、各種の情報を揃えようと努力はしてみたが、2001 年 9 月 11 日の国際的大事件の影響や、私自身の関心がやはりアゲハ属チョウ類が豊富で、かつチョウを通じての現地の友人が居る南インドやタイ・マレーシア・インドネシアへ向いていた事、そして何より身近にフィジーを始めとする南太平洋諸国に強い人物がいないことなどもあり、無理をしてまで行こうという気が起きないまま 2003 年になってしまった。しかしこの年の、1 人の人物との出会いが私とこのフィジーのアゲハとの間を一気に縮める事になった。その人物とは他でもない、萩谷 宏先生である。不覚な事に、私と彼との最初の出会いがどんな形だったかは、既に記憶の外になってしまった。よってそれほど劇的な出会いではなく、むしろ多分に事務的なものだったのだろう。しかしその出会いのきっかけが、私の職場以外での研究活動の場 = 『東京大学教養学部自然科学博物館』の、新展示スペース完成記念絡みだった事は確かである。その後も彼とは博物館関連で時々連絡を取っていたが、2005 年の 3 月、私は彼を、私たちの主催する『東大昆虫同好会』の春の例会に招待した。その席上、彼は自分も嘗ては一時期昆虫に興味があった事、現在は地質を中心に、特にフィジーに関心を持って調査していると話された。そしてその後の雑談の中で、私は非常に貴重な証言を彼から得る事が出来たのである。それは彼がフィジーで石灰岩地帯の調査を行っているという話だった。

石灰岩ーミカン科植物ーアゲハ属の繋がり

アゲハ属チョウ類、例えばアゲハ *P. xuthus*、カラスアゲハ *P. bianor*、クロアゲハ *P. protenor* 等のチョウたちの幼虫がミカン科植物を食べている事は良く知られているし、実際にこれらのチョウの幼虫を飼育したことのある方も多いと思う。しかしこれらのチョウ達と、その食草が生えている場所の土質にまで関心を持っている人物はそれほど多くはない。実はミカン科植物は、ミカンを始めサルカケミカン、コクサギ等、かなり多くの植物が好石灰土質性なのである。例えば東京近郊の奥多摩、五日市、秩父溪谷といった辺りは石灰岩が広く分布する事で有名だが、これらの山地の溪谷には殆どの場合夥しい量のコクサギが生えており、そしてこの植物を常食としているカラスアゲハ、オナガアゲハ *P. macilentus* も沢山の個体を容易に観察出来る。また日本の南西諸島には奄美大島を北限とするシロオビアゲハ *P. polytes* というやはりアゲハ属のチョウが分布しているが、このチョウのこれらの島における個体密度は、各島の面積や緯度には殆ど無関係で、喜界島、沖永良部島、与論島、沖縄本島南部、宮古島、竹富島、黒島の各島で多くの個体を見るのに対し、世界有数の熱帯原生林の残存地域として知られる西表島や、喜界島と同じ位の緯度に有る奄美大島では極めて稀な存在となっている。察しの良い方なら、このチョウの多分布地域が琉球石灰岩の分布にほぼ一致して居る事に気付かれるだろう。実はこのチョウは日本ではサルカケミカンという典型的な好石灰岩植物を食草として好むため、この地域のシロオビアゲハの発生量の多寡は、地表面の土壌中の Ca 濃度に殆ど依存していると言っても差し支えないのである。

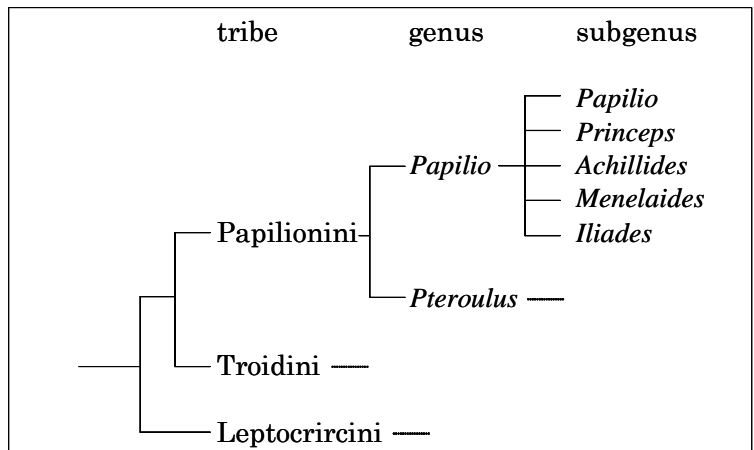
このように考えると、アゲハ属のチョウ達が多数飛び交っている地域の下には良質の石灰岩が埋蔵されている可能性が高いと言える。これが典型的なのは奥武蔵の有名峰武甲山で、今やこの山は余りにも過度な石灰岩の採掘から、そこに生息していた無数の固有植物、稀少な動物類諸共その姿を消そうとしている。ちなみにコクサギに関しては、信越本線上野ー直江津間及び北陸本線直江津ー金沢間に沿った地域を調べた限りでは、この植物は碓氷峠の群馬県側の沢筋には無尽蔵と言って良いくらいに生えているが、峠を超えた軽井沢

以北では殆ど見られない。金沢ではとある民家の庭にこの木があるのを見つけ、その由来に付きその家の人物に尋問しようとしたが、生憎留守で情報収集の好機を逸してしまった。その他日本海側では、新潟県の弥彦神社の境内脇の小川沿いに数本の木があるのを確認したが、これも明らかに意図的に運ばれたものだろう。一方、コクサギの北限は今のところ日本海側では青森県深浦市のみちのく温泉付近で、これは昨年、青森の有名チョウ類研究者：工藤 忠氏のご協力により確認することが出来たが、それらの場所での本種の存在量は、関東や大阪北部の多産地帯のそれとは比較にならない程の貧弱さである。これには土質の問題もあるかとも思うが、むしろ雪やその他の要因による制約を考えた方が、辻褃が合う様に思う。

さて以上の次第だが、私が萩谷先生の話に強く惹かれた理由は正にこの石灰岩にある。私の 2000 年のフィジー探チョウ記をお読み頂ければ判る通り、私が初めてフィジーアゲハと対面・採集したのは鍾乳洞の入り口だったからである。ただそうすると石灰岩とはあまり関連のなさそうな海岸沿いのクラエコパークで本種を複数回見れたのは不自然だが、とにかく私は『萩谷先生について石灰岩地帯を歩けば、このチョウについての情報がきつと得られる』と確信したのである。そしてそれは後述する様に現実のものとなった。

P. schmeltzii とは

さて次にフィジーアゲハこと *P. schmeltzii* と、それをとりまくアゲハ属 *Papilio* について紹介しよう。右の図は、今年の *Zoological Science* 2月号に載せてもらった私の『日本産アゲハ属チョウ類の手相と系統関係、及び産卵植物選択性との関連』の中で、私が示したアゲハ亜科内の系統関係である。アゲハ亜科は3つの族に分割され、アゲハ属 *Papilio* はもう1つの属 *Pteroulus* と共にこの3つのうちの一つ＝アゲハ族を



構成する。従来アゲハ族内のチョウは全て *Papilio* とされることが多かったが、各種 DNA の分析からこのように 2 属に分けた方が良いという結論に落ち着きつつある。ただしこのように分割してもなお、*Papilio* には 100 種以上のチョウが所属し、これらを *Papilio* 内で更にどのように分類するかはいろいろな試案が出されている。今回私が提唱したのは自分自身で行った手相の分析に、翅の模様、及び多くの研究者によって行われた種間雑種による解析を組み合わせたもので、その結果、日本産のアゲハ属チョウ類 10 種については綺麗に分けることができたのだが、外国のチョウを加えた場合、これが妥当かどうか些か不安材料的な種がいることも事実である。その最たる例は、熱帯アジア地方からオーストラレイシアにかけて広く分布するアオモンキアゲハ *P. fuscus* とその関連種だろう。これらのチョウは、成虫は前後翅共に黒い基調色の上に、後翅の前寄りに大きな淡黄色の円形斑がある。これはインド、東南アジア、そして日本にも分布するモンキアゲハ *P. helenus* や、それよりやや分布範囲の狭いシロモンキアゲハ *P. nephelus* と同様の斑紋パターンで、この点では本種をこれらの種と同じ亜属 *Menelaides* に分類することは不自然ではない。ところが一方でこのチョウの幼虫や蛹は明らかにこれらの種とは違い、むしろ別の亜属 *Achillides* に属するカラスアゲハ等との共通点の方が多い。従ってどちらの特徴に重きを置くかで、分類が全く違ってしまうのである。交配実験の結果では明らかに *Menelaides* との近縁性が高いと出ているが、この結果に納得していない研究者も多く、最終的な合意にはなお紆余曲折がありそうである。

今回問題にしているフィジーのアゲハ *P. schmeltzii* には更にもう一つの問題がある。アオモンキアゲハは、上記の通り成虫と幼虫とでの 2 面性だったが、*P. schmeltzii* では成虫の模様が *Achillides* と *Menelaides* を混合した様な感じになっている。重要なのは 1. 前翅裏面の外寄りに存在する淡黄色の帯が、前寄りの部分で胴体の方に湾曲するのは通常の *Menelaides* には全く見られず、*Achillides* のカラスアゲハ、ルリモンアゲハ *P. paris*、タカネクジャクアゲハ *P. krishna*、オビクジャクアゲハ *P. palinurus* 等に見られること、2. 後翅裏面には円形淡黄色斑が全く見られず、代わりに青色の鱗粉が発達していて、これに一番近い感じを受けるのは *Achillides* のオビクジャクアゲハ種群であること の 2 点である。このように雑多な印象を受けるこのチョウを解析すれば、うまくいけばこれら両亜属の関連から、更には *Papilio* 全体の理解に繋がる何かを得られるかも知れず、多くの労力をこのチョウにつぎ込むのは、決して無駄ではないと思われた。なお本種の幼虫や蛹に関しては 1900 年代初頭に書かれた書物の中に記述があるが、何故か食草に付いての記述が全くなく、その点でこの内容については少々信憑性に欠ける部分がある様に思われる。勿論、前述の通り本種の幼虫にも大きな関心が持たれるため、可能ならばこちらも一遍に片づけようという目論見もあった。

ところで前報では申し分けないことに、このチョウに関して事実誤認があった。私はその中で、『本種が東南アジア～オーストラレイシアから見て一番東の島に分布している種』とした。ところが実は更に東のサモア(旧称西サモア)にも *P. godeffroyii* というアゲハ属のチョウがいたのである。なぜこうした間違いをしてしまったのかというと、このチョウの模様がフィジーやサモアよりも西=*Papilio* の分布本拠地側 のニューカレドニアに分布する *P. amyntor* にそっくりだったため、私は *P. godeffroyii* をフィジーとニューカレドニアの間にあるバヌアツに分布するものと完全に勘違いしていた。この事実はこれらのチョウの由来にとっても重要な意味を持つ。つまりニューカレドニア～フィジー～サモアに分布する各 *Papilio* は、両端の地域に分布する種どうしの模様がよく似ていて、真ん中の *P. schmeltzii* だけがやや異なっているのである。もし一番端のサモアの *P. godeffroyii* が違う模様をしているのなら話は簡単で、太古にこの地域に存在したと言われる大陸(これが地学屋さんにとっては我慢ならない仮説であることは私も承知しているが)を東進するうちに次第に模様に変化して行ったと考えれば良い。しかし真ん中が違うとなると話は単純ではなくなる。ちなみにニューカレドニアとフィジーの間のバヌアツに住んでいるのはこれら 3 種とは明らかに系列が異なる、東南アジア～パプアニューギニア～ソロモンの流れの種 *P. canopus* (*P. fuscus* に近縁とされる)で、この島はニューカレドニアとフィジーの間に、現在そこに住んでいる生物諸共、ソロモン方面から割り込んできた可能性もある。これらを踏まえる時、フィジー北側の海底に出現したプレートの新たな湧き出し口の形成という事実は、更に興味深いものとなるだろう。

以上の通り、これらの地域に住んでいるアゲハ類を調べることは、単にアゲハ類の知見を増やすに停まらず、より多方面の科学の分野の研究に資するものであると思われる。私がこの小さな島々に住んでいるアゲハ類に非常な関心を持っているのは以上の事実からである。

2006 年 3 月 21 日: スバの USP にて

では 2006 年 3 月の成果を紹介しよう。全体の行程については既に萩谷先生の情報がアップロードされているので、私の関連の部分に限って記述する。3 月 21 日早朝にナンディ空港に到着後、国内線旅客機でナウソリへ移動、そこからバスで USP へ行く。今回はチョウ好きの私が来るというので、萩谷先生が話が合いそうな教授=WINDER 氏を誘ってくれていた。こうなると判っていたら、何かプレゼンの用意もしてきたのだが、ぶっつけ本番の殆ど出鱈目に近い英単語の羅列で、上記のような話と、この島で一緒にこの研究をやってくれる人物を探したいといった趣旨のことを喋った。しかし後日、萩谷先生から WINDER 教授がこの話

に非常な関心を寄せていると聞き、これはうまく行くかもと感じた。

その後は最終的には他の参加者と一緒にクロウズネストへ行く。矢ヶ部氏、大島氏と同室となった。

22日：懐かしのシンガトカ川の東側道路

昨日はスバから直行したため、ホテルの場所がどこなのか今一つピンと来ず。しかし目的地へ出掛ける途中でシンガトカ市内に連れて行ってもらった(夕食その他の食材の買い出しのため)ことから位置関係がはつきりした。しかもこれから行くのはシンガトカ川上流の、川の東側の道＝バックロード沿いの集落だという。まあ、まさかあの集落に行くわけではないだろうが、同じ川の流域の石灰岩地帯ならば、充分目標と出会う可能性はあると期待し、一緒に目的の村を目指す。10:00頃に着いた場所＝急傾斜の斜面に民家が点在し、一番高い所に集会場のあるタワタワンジ集落 はやはり見覚えのない場所で、2000年に来た集落は、こんな急傾斜面ではなくもっと平坦な場所にあった。ただしその時写した写真の中に、今回も見事の出来た道路東側の断崖絶壁を写したものがあつたので、この近くまで来た事は間違いない。お邪魔した集会場で歓迎のカバを頂いた後、集落のやや下流寄りから山肌の林道に取り付き、樹林帯を進んだが、自動車道路から林道へ入ろうとした正にその時、目標らしいチョウが目の前を横切った。林道にはチュレ *Micromelum* と思しきミカン科植物もあつたが、この日確認したのは小さいのが1株だけに終わる。その他、カレーブッシュやポメロ *Citrus maxima* (ヒラドブンタン、ハッサク、グレープフルーツ等の大親分)、*C. medica* (長さ10cm近い巨大なラグビーボール型の実を付けるレモンの御本家)も観察したが、次第に道が沢筋から外れて明るい低木樹林帯や、終いには草原に出てしまったことから今日はもうアゲハには会えそうもないと断念、実際その通りになってしまった。しかし昼過ぎに翌日の行程を聞いたところ、自動車道路の少し先には確かに鍾乳洞があり、明日＝23日はそこまで行くという。これは大いに期待ということになった。

帰りは途中にある、この島に一番昔に作られたトンガからの移住者遺跡＝タブア砦を尋ねた。人間調理台という物騒なものがここの目玉らしいが、それより私が驚いたのは、この調理台へ行く林道の谷側の斜面に、地面が見えなくなる程に一面にカレーブッシュの幼木が生えていたことである。この密度は恐らくこの島でもそうそうは見られないものと思われ、この植物を見るためだけにここへ来る価値もあるのではと思う程の圧倒的な光景だった。勿論、何故このようなことになったのか、手がかりは全く掴めなかった。

23日：思い出の鍾乳洞へ

昨日と同じく、川の東側の道を上流へ向かう。タワタワンジ集落でいったん停車したあと、その少し先の、シンガトカ川の支流の一つ＝ガラガラ沢を越える橋のところで車を置き、沢を遡るコースに入った。ここは確かに見覚えが有るが、2000年に来た時に比べて水量が格段に多い。川原を越え、集落を越え、樹林を通過して辿り着いた鍾乳洞の入り口は、正しくその時に来た場所だった。ただし水は鍾乳洞の出入り口の殆ど高さ一杯まで来ていて、中に入ることは全く不可能である。雨季と乾季とではこんなにも違うのかと少々驚く。今回は鍾乳洞へ行く道筋では目標には会えず。前にチョウが来た木もどうやら無くなった様だ。6年近く経っているのだから、ある程度景色が変化してしまうのは止むを得ないだろう。今回はここから鍾乳洞の前を左に曲がり、沢を越えて反対側の林の中の道を進むコースをとるそう。みんなが鍾乳洞の出口付近で石を観察している間に一人で先に進み、沢の川原に出る。上を常緑広葉樹が覆っていてかなり暗いが、何か所か上が開けて水面や川原に陽光が落ちている。ポイントとしては良さそうだと思ううち、期待に応じてアゲハが登場。川原の上を飛んでいく。その飛翔コース＝チョウ道は、日本のカラスアゲハに近い、比較的暗い部分を中心に、時々直射が当たる部分を横切る、といった感じだった。ただし2回目の飛翔を観察する前に

みんなが追いついてきてしまい、行動パターンの確定は次回以降に繰り越しとなった。

川を渡って林道を進み、少し先で再度、蛇行して来た沢を横切る。この場所ではシジミ類の集団吸水が観察できたが、アゲハの姿は全く無し。この場所の下には断層があるらしく、もしかしたら、この場所には他の場所より水の中の金属イオン濃度が高くなっているため、チョウが良く集まるのかも知れない。

その後は更に標高を上げ、ガバの果樹園を抜けて草原の中へ出る。萩谷先生からこの周辺の地質構造について簡単に説明してもらった。この先の山肌の転石の中に、メノウが見られることが有るので、炎天下の草原の中を西戸君と一緒に探す。それらしいのを見つけたので萩谷先生に見せたら、何と彼はその石に齧りついた。文字通り歯がたたなければメノウらしいのだが、こうなると石屋さんも命懸け? だ。流石にここではアゲハは愚か草原性のチョウも少なく、木陰で休憩した後、戻りにかかる。行きにシジミ類の集団吸水を観察した現場で、矢ヶ部氏が分析用に川の水を採取した。面白い結果が出れば良いのだが。

この日の昼間はかんかん照りの天気、こういう時はチョウも大方明るい日陰に集まることが多く、それを調べる人間様もあまり暑い思いをせずに済む事が多い。しかし相手が日陰に逃げ込んでくれない植物や岩石鉱物をやっている人はそれどころではないなと実感。ところが夕方頃から雲行きが怪しくなり、日没～夜半過ぎまで豪雨となった。

24日: クラエコパークでの勝利

今日から 26 日午後迄は、調査団はそれぞれの目標にそってマナ島行き、スバ行き、そしてシンガトカ近郊残留の 3 つに分かれる事になった。残留組は私だけで、クラエコパークと鍾乳洞周辺を探索する事にし、まずこの日はクラエコパークに出掛ける。クロウズネストー目標の位置関係が今一つ良く判らなかった為、タクシーを利用(2FJD)。ここは出掛けてみると判るが、非常に狭い谷筋に僅かに原生林のな植生が残されたという感じを受ける。少し来るのが早かったため 10:00 の開園を待つ。うっかりして入場料を用意するのを忘れたが、さすがにシンガトカ近郊の有名観光地だけあってクレジットカードが使えた(20FJD)。場内は、鳥類や爬虫類の網室が所々に作られている他は、鍾乳洞周辺の暗い森林と同じ雰囲気である。今回、ここに来た理由は 2 つ。1 つは勿論 *P. schmeltzii* を観察する事だが、もう一つはこの島のミカン科植物の予習である。この時点では、私はこの島のミカン科植物としてミカン属数種、チュレ、ベルノキ(*Aegle malmelos*、2000 年ホテルモキャンボの裏庭)、ゲッキツ(*Murraya paniculata*、2000 年クラエコパーク内)、カレーブッシュ、ナンヨウアワダン(*Melicope hortensis*、2000 年クラエコパーク内)を確認していたが、このうち私が *P. schmeltzii* の本命の食草と考えていたのはナンヨウアワダンで、この植物の特徴をもう一度把握しておこうとしたのである。アワダン類は日本にも 1 種、八重山群島のみを生えているが、東南アジアの広い地域でアワダン類が *Papilio* の重要な食草となっているのに対し、日本のアワダンは自分を食べ始めたチョウの幼虫を 3 日後に中毒死させるという特性を持つ。これが、日本産 *Papilio* 幼虫の胃袋の解毒能力の欠如によるものか、それとも日本のアワダンに固有の強烈な有毒成分があるためかと言った事については、今のところ何も判っていない。軽く園内を一回りしてみたが、チョウの姿は非常に少ない。しかしナンヨウアワダンはうまい具合に観察路沿いに数本が生えており、このうち一番大きいのは 5m 程にもなっている。よし、この木の下に張り込んで、♀チョウが来るのを待とうと決めた。

公園には今日も外国人を含め、結構、人が来ている。小学生の一群も学校の授業として来ているようだ。みんな一カ所に停まる事は無く、順路を歩いていく。その中でビデオカメラを持った日本人が一人だけ一カ所に貼り込んでいるものだから、たちまち従業員の注目するところとなった。ここで何をしているんだと聞いて来る。チョウの撮影をしていると答えると、それならあそこにいるぞ、と係員が示した先には、アワダン

の花に来ているルリマダラ類がいた。記録として1カット撮影。チョウを写すなら別の場所の方が良いんじゃないか、案内してやろうか、等と話してくれていた所へ、黒い、少し大きめの影が頭上をよぎった。目標出現、あのチョウを狙ってたんだと言ったものの、そのチョウは我々をかすめるようにして急上昇し、樹林の中層部の葉の間へ潜り込んだ。一応カメラは回したものの、ろくな絵にはなっていないだろう。まあ、今の飛び方なら♂チョウだから良いか等と話していたら、別の従業員が後ろから大声で呼びかけて来た。振り向くと、何と今、飛び去ったと思ったそのチョウが、少し離れた花壇の花に来ている。この花壇は基本的には樹林の下に作られているが、通路や鳥舎との関係で、一部に直射日光が落ちている。チョウが来たのは正に日向と日陰の境界上に位置する花だった。直ちにビデオスタート。ファインダー越しに確認したその個体は綺麗な♂チョウ。日本の *Papilio* 同様、あまり一つの花には落ち着かずにヒョコヒョコと飛び回るが、その都度、少しずつ違った角度からの絵を拾わせてもらえるのは却って有り難い。ところがここで問題?発生。さっき公園の奥に入って行った小学生軍団が戻って来てしまった。まずい、彼らに通られたらチョウが逃げてしまう。しかし次の瞬間、引率のインド人教師が前へ飛び出して、彼らを静止させてくれた。ここにお見せする写真は、こうした周囲の方々の温かい御配慮の賜物である。やがてチョウは飛び去った。場を取り持ってくれた方々一同に感謝。従業員や引率教師以下一同も『よかったね』という雰囲気の中で通っていた。



この後、従業員の方に場内でよくチョウが見れる場所に案内してもらったが、やはりポイントとなるのは林内の日溜まりで、ナンヨウアワダシもこうした場所によく生えていた。このうち一カ所では、一人で通った時には束になって生えていた本種を完全に見落とししていた。やはり地元の人に案内してもらうのは必要だと感じた。場内を再度一巡した後、これまた再度、元の場所に張り込んだが、12:30を過ぎた辺りから雲が増えて来たかと思う矢先に雷鳴が轟き出したので、帰りにかかる。道は把握できたので歩いたが、約30分で到着。ただし今日はそれほど酷い雨にはならず一安心。

25日：タワタワンジ集落周辺の大敗+インド人タクシードライバーが早く帰らなかった理由

この日は22~23日の調査にも付き合ったインド人ドライバーにタワタワンジ集落迄の往復を依頼した(120FJD)。朝の天気は快晴をも凌ぐ?爆晴で、暑さは厳しくともアワダシ類 get は確実と期待は膨らむ。08:30にタクシーにホテルに来てもらい目的地へ直行。09:30に着いて帰りの時間を相談したら、私の14:00発に対して彼の要求は13:30発。理由は判らなかつたが、取り敢えず先方に合わせて決着。

今日は小川に沿って歩かずに、自動車道路沿いを歩く事にした。昨日クラエコパークで見たような環境なら道路沿いにも結構有るようだし、今日も川の水が多く、間違つて転落してずぶ濡れになったらたまらないという判断。装備を整え、出発。予想通りの環境はそこそこ見れるが、こうした場所の殆どは、アカネ科の様

な植物(後で勝木先生から、実際にカフェノキだと教えてもらった)がびっしり生えている。これがフィジー原産の植物かどうかは私には判らないが、これでは道を歩いているだけでは目標を見つけられそうにない。林に入り込めそうな場所は出来るだけ入るようにしたが、そうした場所も殆どアカネ科植物に席卷されていて、アワダンには愚かチュレらしい木も見つからず。チョウもアゲハは出て来てくれず、マダラ類やジャノメ類が飛ぶ程度。よって途中から目的をチョウの分布調査に切り換えた。目の前に出て来たチョウを出来るだけ漏れなく撮影する。11:30 頃にいったん橋まで戻る。橋の上や周囲の湿地でシジミ類、キチョウ類が集団で吸水している。今度はここから集落の方へ歩いてみたが、やはりアゲハとミカン科植物については成果無し。12:30、突然空が雲に覆われ、一瞬だったが、全身が震え上がる程の冷氣塊が通過した。この意味をこの時点で感じ取れなかった私は不注意そのもの。雲は約 15 分で通過し、再び気温は急上昇。その後は橋の周囲を行ったり来たりしながら更にチョウの絵を稼ぎ、13:30 に車に戻った所が、ドライバーはあと 30 分なら待っても良いという。この意味も私はこの時には理解できず。再度、奥の方を調べ直したが、やはり成果無く、14:00 にポイントを出てホテルには 15:05 着。その次の瞬間、私はこの日のドライバーの言動を理解した。部屋に戻るなりあつという間に上空が積乱雲に覆われ、みるみるうちに部屋の窓から外が見れない程の豪雨をも凌ぐ?爆雨となった。山の中でこれにやられたら生きて帰れる保証はないように思った。多分、タクシードライバーは朝の天気と、この時期の気候パターン、それに天気予報を総合して午後には必ず大雨になると確信していたのだろう。昼過ぎの冷氣はその予兆だったらしく、山へ行く者、こうした状況の変化は決して見落としてはならないのだと実感した。ただしこうした降りだったので長続きはせず、30 分後には再度素晴らしい晴天となった。



26 日: クラエコパークの現実+モキャンボにて

この日の 15:00 に昨日と同じドライバーにナンディのホテルへ 100FJD で連れて行って貰うことにしており、午前中は再度クラエコパークへ行く。今日は前日のアワダン探索失敗を受け、この島のどんな場所でアワダンが見られるのかや、園内でアゲハが産卵している所を見た事はないか等、クラエコパークで質問する項目を確認。今日も物凄い快晴となったが、もう道筋は把握したので歩いて出掛けた。24 日に比べて気温が高いせいか、今日はその時にアゲハを観察した場所にも彼等はやってこない。仕方なく園内を巡回したら、これも今まで見落としていたアワダンがあるのに気付いた。しかもこの木は、通常アワダン類が 3 枚複葉の葉を持つのに対し完全な単葉で、よく似た別の木と紛らわしい。昨日見つからなかったのはこうした事情もあったのかとこの時は思う。13:30 を回り、そろそろ帰りに向かわなければならなくなったが、ゲート近くの事務所に従業員がいたので用意した点について尋ねたら戦慄の事実!! 私が山で必死に探していたこのナンヨウアワダンはフィジー自生の種ではなく、胃薬用に別の島から移入されたものだという。これで私の予想

は完全に崩壊し、*P. schmeltzii* の食草探しは振り出しに戻ってしまった。

14:30 にエコパークを出て 15:00 にホテル正面に着いた所で、道の向こう側から約束通りタクシーがやって来た。ロス時間ゼロでナンディへ向け出発。途中、交通事故の現場(スバ方向に走っていた車が対向車線を越えて道路脇の土手にあった電柱に接触、電柱は根元からへし折られ、車は道から転落し掛かった状態で静止、金属部の破損はそれほど酷くないが、窓ガラスは粉碎もしくは全体剥離)。一瞬停止したら、何と ATS の谷さんもそばにいた。その後は特に支障無くモキャンボへ。以前来た時にあったベルノキを確認しようとしたら、綺麗サッパリ無くなっていた。

これ以降は萩谷先生と一緒に行動。今回はある程度、このアゲハの行動観察に使えるような場所を絞り込む事が出来、その点では成果大だったが、食草については、改めてこの島に有る全部のミカン科植物を洗い直さなければならなくなってしまった。